

Wilde Frang

Violin Recital



ヤンソンス、ブロムシュテット、ハイティンク、ラトル、サロネン、ノット、ハーディング、ユロフスキら名だたる巨匠たちにその才能と実力を認められた、ノルウェーが生んだ若きヴァイオリニストが、満を持して紀尾井ホールにデビューします。今回、日本でのリサイタルはこの1回のみ！

ヴィルデ・フラング ヴァイオリン・リサイタル

4/15^月

19:00開演

すぐれた女性のヴァイオリニストは以前から少なからず存在していたが、それでも今ほどその活躍が華々しい時代はなかったのではないだろうか。特にここ15年ほどの間に登場した若い世代には、才能溢れる顔ぶれがまさに綺羅星のごとく揃っている。たとえばコパチンスカやヤンセン、バティアシュヴィリ、ハーンら70年代終わり頃に生まれた面々に、バイ・スクリデ、アラベラ・美歩・シュタインバッハー、ユリア・フィッシャー、庄司紗矢香、イブラギモヴァら80年代前半組の名を数人並べるだけで十分だろう。

そして、これら錚々たる先輩たちに続いて世界のトップ集団に加わったのが、ヴェロニカ・エーベルレと、この4月に紀尾井ホールにデビューするヴィルデ・フラングである。

ノルウェー生まれのフラングは鈴木メソードでヴァイオリンを始め、7歳から10年間オスロ近郊のブラッド・ドゥエ音楽学校で学んだ。先生だったヘンニングとアルフ・リチャードのクラッゲルード兄弟の教え方はユニークで、灯りを消した闇の中で練習させたり、怖い話を聞かせて怯えながら弾かせたり、その一方で歌ったり踊ったりと、様々な方法で彼女の感受性を育ててくれたという。以前筆者に、「彼らは私の音楽の扉を開く『金の鍵』を持っていたのだと思う」と、おそらくはグリム童話を引き合いに出しながら、懐かしそうに話していたのを覚えている。その「鍵」によって彼女の才能は見事に開花し、12歳でヤンソンスに認められてオスロ・フィルのソリストに招かれ、さらにムターにも見出され、彼女や内田光子らの指導を受けることになった。

初来日は2011年。この時点で演奏活動は既に順風満帆なスタートを切っていたが、その評価を確固たるものにしたのが、翌年のスイス銀行ヤング・アーティスト・アワード受賞である。副賞としてその夏のルツェルン音楽祭でハイティンク指揮のウィーン・フィルと共演し、一気にスターダムへと駆け上がった。こうして世界中から引く手数多

となったフラングだが、目まぐるしいスケジューリングの中でもその音楽は常に自然体。音の美しさはもとより、早くから仕上がっていたテクニクも無論素晴らしい。正確なピッチは彼女の耳のよさを証明している。また長いリーチを活かしたボウイングも、無駄がなく余裕を感じさせる。作品やフレーズに沿ったキャラクターや情感を、多彩なヴィブラートを用以て弾き分けるセンスは、幼い頃から育まれた豊かな感性によっているのだろう。

来日4度目にして、ついに実現することになった今回の紀尾井ホールでの初リサイタルでは、後半にバルトークの第1ソナタをプログラムしている。バルトークは昨年リリースされた協奏曲録音でフランスのディアパゾン・ドール年間最優秀賞アルバム賞(協奏曲部門)に輝いたほど得意としている作曲家でもあり、ソナタは今最も弾きたい作品なのだろう。ブラームスの第1ソナタも、シューベルトのロンドも、日本で披露するのはこれが初めてのほうで、期待は高まる。

共演のピアニスト、ミハイル・リフィッツは、2013年頃からフラングが常に自分のリサイタル・パートナーとして気心の知れた仲間。その演奏を聴けば即座にソロ・リサイタルを切望したくなるような魅力を持つ音楽家でもある。ふたりの丁々発止と繰り広げられる音によるおしゃべりにもぜひご注目いただきたい。